

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

●多摩美術大学美術研究科デザイン専攻

「異文化相互批評が可能にする高度人材育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

国際講評会を取組期間に日本2回、中国2回、韓国1回、フィンランド1回の計6回行った。

国内開催では多国籍の学生・教員が参集するため、作品を介する批評の根幹である言葉の

問題があった。

海外開催では、相手校との展示会場の実情、展示方法、作品輸送や搬入等、詳細に渡る準備が必要であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・海外開催では作品の輸送料金の問題、通関の問題等国によってさまざまな事情があり、対応に苦慮した。
- ・海外の協力校で「講評会」形式の教育がいままで無いところもあり、準備や進行を理解してもらうのにかなりのコミュニケーションを要した。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・国内開催では同時及び適時通訳の組み合わせによる新たな通訳システムを導入し、言葉の問題解決を図った。
- ・海外開催のケースでは会場の状況が分かり辛く、会場図面の開示などを要請したが正確な図面が入手困難であった。そのため、展示の問題解決のために展示準備に精通している教員を運営に加えた。